

新刊紹介

著者	清水 建美, 里見 信生, 栗原 智昭, 鈴木 三男
著者別表示	Shimizu, Tatemi, Satomi, Nobuo, Kurihara, Tomoaki, Suzuki, Mitsuo
雑誌名	植物地理・分類研究
巻	41
号	2
ページ	6p.
発行年	1993-12-25
URL	http://hdl.handle.net/2297/00055678



および1993年春金沢と松本で行った。ハナノキ雌親の場合も雄親の場合も、交雑の結果、多かれ少かれ成熟果実を得ることができた。得られた成熟果実を直播および低温処理後播種したところ、前者では翌春、後者では直ちにかなりのともに高率で発芽した。試みに数個の芽生えとそれらの両親個体の葉から全DNAを抽出し、RAPD法を実施したところ、2種の

プライマーで両親に特異的なDNA断片が検出された。芽生え個体では、これら両親のDNA断片を共有することが分った。これは、雑種形成の分子の根拠に外ならない。なお、雑種の芽生えは、とくに子葉の大きさにおいてすぐれ、雑種強勢が認められた。
(received June 14, 1993: accepted Oct. 12, 1993)

○伊那谷自然教育研究会 中央アルプスと伊那谷の自然 A 5判, 228頁。1993年9月9日発行, 信濃毎日新聞社。定価2,600円。

信濃毎日新聞社では、郷土の自然を広く一般に紹介する目的で、地域ごとの自然解説書“自然シリーズ”を発行している。著者は地元で詳しい研究者および自然愛好者である。本書はこのシリーズの5冊目で広く伊那谷の自然を扱ったもので、I. 自然を形づくるもの、II. 植物の生活、III. 動物の生活、IV. 天竜川の生物の5章からなる。植物に直接関係するのは、Iの第5節生物地理学からみた伊那谷とIIである。前者では、ハイマツ帯やシラビソ帯では、日本海型分布の植物が大部分を占め、ブナ帯では太平洋型分布が多くなり、クリ帯やカシ帯では大部分が太平洋型分布の植物となるという興味深い事実を指摘している。また、後者では各植生帯ごとに、植生のようなすや主な構成種を写真とともに解説してあるばかりでなく、気候や地形などの立地条件と関連させながらその成立要因を説明する努力がなされていることが特筆に価する。(清水建美)

○第17回全国育樹祭三重県実行委員会 郷土の樹木—三重県の樹木誌— B 5判, 107頁。平成5年10月発行。非売品。

本書は本年「うるおいとやさしさを伝える 豊かな緑」を大会テーマに行なわれた、第17回全国育樹祭を契機に、先人たちが堂々と築きあげ、今も人々に深いかわりを持ちながら成長する、貴重な樹木の姿を広く県内外に紹介し、人々の緑への関心をさらに高めることを目的に刊行したという。

書名は「郷土の樹木—三重県の樹木誌—」となっているが、内容は長年の風雪に耐え、地域住民と親しんで来た三重県内の巨樹・巨木林を紹介したもので、選ばれた101件を、笠井道男氏撮影のカラー写真に、武田明正氏が、解説文を執筆している。

選定された101件を、天然記念物指定から見ると、国7件(三多気の桜、東阿倉川のマメナシ、西阿倉川のアイナシ、白子の不断桜、椋本の大椋、果号寺のシブナシガヤ、野村の一里塚のムクノキ〈史跡〉)、県25件、市9件、町4件、村2件、計47件である。また樹種から見ると、55種で2件以上の種はスギ・カヤ各8件、ヒガンザクラ・クスノキ各6件、クロマツ・スダジイ各4件、イブキ・コウヨウザン・イチヨウ・タブノキ・エノキ各2件である。(里見信生)

○初島住彦*: ケイリンサイシン日本に産す Sumihiko HATUSIMA*: *Asarum heterotropoides* var. *mandshuricum* Newly Found in Japan

今年5月(1993年)上旬に熊本県阿蘇郡波野村の植物研究家^{フル}義文氏から変わったサイシンの一種を発見したので鑑定してほしいとの依頼があり、生品3株が筆者の所に送ってきたので調べたところ、従来朝鮮、満州に知られていたケイリンサイシンであることがわかった。ケイリンサイシンは樺太、千島からわが国の東北地方に分布するミチノクサイシンの変種で、母種とは萼裂片が鋭頭、葉は心状腎形でなく卵心形で、全株無毛なる点で区別されている。萼筒部が扁円形で裂片が著しく反曲して萼筒に密着する点ではフタバアオイにも似ているが、根茎は長く横走せず、全株無毛で、葉は大きく幅7cmに達し、葉柄は長さ15cmにもなり、花梗も長さ7cmに達し、花柱は離生、萼片は下半部がゆ合している点で区別できる。ウスバサイシンとは萼裂片は卵形でなく、広卵形又は卵状腎形で、上方は開出せず著しく反曲する点と、葉が鋭尖頭でなく鋭頭になる点で区別できる。齋氏によると本変種は阿蘇の原野の5ヶ所に多数自生しているという。本変種は朝鮮では済州島、梅加島、寇島、全南、慶南、江原の諸道、満州では黒龍江、吉林、遼寧の諸省に知られている。ケイリンなる名前は韓国の古都慶州の別名鷄林にもとづき故前川博士が命名したものである。本変種の発見報道後、熊本工業大学の浜田善利氏から便りがあり、同氏は1979年既に本変種を阿蘇の原野で発見され1981年に現地ですライドに撮影していたが詳しく追求しないままであったという。その後深葉でも発見し、同氏が送った阿蘇のものは東京理科大学の葉草園に栽培されているという。阿蘇には満鮮系の植物が多数知られているが今回の発見で更に一種加えたことになる。最後に筆者の依頼により阿蘇産の本変種の花の解剖図を描いて下さったカンアオイの研究者山幡英示氏に感謝の意を表したい。

に与えた影響を検討した。

焼失地におけるヨシをはじめとする多くの植物の最大高は、非焼失地に出現する植物の最大高とほとんど差がなかった。ヨシ群落の第一層を占める優占種のヨシの密度は約30(m⁻²)で、焼失地と非焼失地の差はほとんどなかった。第二層の種では火事直後にミズトクサの密度が高かった。また、アカネムグラ、ドクゼリ、オオヨモギなどは非焼失地には出現せず、焼失地だけに出現した。一方、非焼失地だけに出現した種はほとんどなかった。

ヨシ群落で優占度の高いヨシ、イワノガリヤス、ミズトクサなどは焼け残った地下部からの栄養的

再生によって出現した。これに対して、アカネムグラ、ドクゼリ、オオヨモギなどは栄養再生よりも種子発芽に依存して固体数を増やした。湿原のヨシ群落でも、火事後の直射日光による地表面の温度上昇や変動幅の拡大などの火事の間接的な影響が存在し、山火事跡地などと同様に休眠していた種子が発芽したものと推定される。

湿原のヨシ群落の火事では、大きく相観を変えるような植生の変化はおきないが、種子発芽固体の増加という一時的な変化がおり、このことが将来にわたって植生に変化を及ぼしていく可能性はある。(received July 26, 1993; accepted Oct. 29, 1993)

○ 志村義雄 日本のイノデ属(シダ植物) B5判, 160頁。平成4年9月1日発行。自費出版, 〒420静岡市大岩2-20-11。定価6500円(送料別500円)。

金沢大学理学部では少数派のシダ屋として全国から当大学の標本庫に集まるシダ植物標本の同定のほとんどを任されている私だが、毎度頭を抱える苦手な分類群がある。それがイノデ *Polystichum* (オシダ科)だ。単に種類数が多いだけでなく、形態がお互いに似通ったものが多く、さらに雑種もこれまた多い。手元の図鑑や分布図集を総動員しても結局名前を決められない場合さえある。

今回志村氏が出版されたこの著書は、そんな私にとって大変参考になる手引きであった。日本産の全種、全雑種(33種4変種4品種10奇形53雑種)をそれぞれ解説するのは勿論のこと、形態、染色体数、分布、果ては和名の由来まで、多角的な情報が盛り込まれている。とくに重宝しそうなのは近似的種類間の比較を行っている項目である。ここではカラクサイノデとアズミイノデ、イノデとアイアスカイノデとアスカイノデなど区別が難しい種類同士の特徴を比較・整理しており、検索表を補うものとして歓迎したい。また、文献に関する情報が充実している点も見逃せない。

自費出版ということで頁数を絞り込んだのだろうか、使い勝手という点では最近の立派な図鑑には及ばないのが残念である。しかし、我々シダ屋にとって役に立つ一冊であることには変わりはない。

最後になってしまったが、志村氏の長年に及ぶ研究活動に心から敬意を表したい。(栗原智昭)

○ 山口県立山口博物館 ふるさと山口・江戸時代の動植物図 B5判, 256頁(カラー約)80枚, モノクロ約130枚。平成5年4月28日発行。2500円+〒450円。

幕府の参勤交替の政策により、諸大名は隔年、江戸に出仕した。この結果、藩主は江戸城で地方の情報交換を行ない、それぞれの藩内の土産物を活用し、産業を振興することに努めた。

本書は258年前(徳川吉宗の時代)行なわれた、全国の産物調査において、毛利藩より幕府に提出された「長門国産物之内江戸被差登候地下図正控、元文3年(1738)、山口県文書館蔵」と「周防国産物之内絵形、元文年間、萩市立図書館蔵」を紹介したもので、内容は第1～第4部からなり、第1部では原本を1/4に縮少し、全容をしめし、第2部ではその図の解説、第3部では産物帳の成立の背景と絵図作成の過程、第4部では産物調査の過程で作成された「長防産物名寄」を加えている。購入御希望の方は山口県立山口博物館(〒753 山口市春日町8番2号)宛に申込まれると送本される。(里見信生)

○ 尾川武雄・小川信正・吉田三喜男 伊豆大島植物目録 B5判, 38頁+索引12頁。平成5年8月、大島自然愛好会発行。非売品。

私は大島に昭和32年頃、幾度も渡島した。伊豆七島では最も東京に近い島でありながら、行く度に未記録の種類が、次々と追加出来るので、興味深かったのである。

この頃知り合い、御一緒に歩いた方が、著者の一人である尾川武雄さんと、役は家業のかたわら、この目録の共著者の方と大島自然愛好会を創立し、島の調査を続けて居られる。

本書はその成果であって、シダ以上の植物118件、410属、716種が掲載されている。この中で、ラン科を見てもコオロギラン・アキサキヤツシロラン・カゲロウラン・ヒメノヤガラなど、甚だ面白い発見と思うが、少々気になった事はこれ等の貴重な標本を虫害やその他の損傷から護り、散逸させない方策を考えておられるだろうか。(里見信生)

引用文献

- 原 寛, 1960. 稀品ナツガママンネングサ. 植研雑 35: 352.
- 鎌田泰彦, 1991. 地質・鉱物. 長崎県天然記念物実態調査報告書(対馬を除く), 23. 長崎県教育委員会, 長崎.
- 長崎県, 1975. 土地分類基本調査「佐世保南部」
- 長崎県, 1976. 土地分類基本調査「神浦」
- 大場秀章, 1982. ベンケイソウ科. 「日本の野生植物. 草本II. 離弁花類」(佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊次・富成忠夫編) pp.139-152. 平凡社, 東京.
- 外山三郎, 1980. 長崎県植物誌. pp.60-62, 長崎県生物学会, 長崎.
- 我が国における保護上重要な植物種および植物群落の研究委員会 植物種分科会(編), 1989. 我が国における保護上重要な植物種の現状. pp.194-195. (財)日本自然保護協会, 世界自然保護基金日本委員会, 東京.
- 山田スミ子, 1984. ナツガママンネングサを栽培して. 長崎県生物学会誌 27: 17.

(received Jan. 16, 1993; accepted June 23, 1993)

○ 湯浅浩史 植物と行事—その由来を推理する—

B 5 変型判, 248頁. 平成5年7月25日, 朝日新聞社発行. 1,200円.

本書は朝日選書478である.

年中行事には, すべてと言って良い程, 植物が関わっているが, 著者は何故, それ等の行事に特定の植物が用いられるのか, それを明らかにしようと筆をすすめて居られる。紹介者は極めて興味深く拝見したが, 多くの方々に御購読をお奨め申し上げたい。 (里見信生)

○ 年輪年代学の手法を用いた土方領境界マツの枯死年の推定 (寺田和雄*・鈴木三男*) Kazuo TERADA* and Mitsuo SUZUKI*: Dendrochronological Dating of Dead Pine Tree on the Boundary of Hijikata Territory, Ishikawa Prefecture

1991年2月20日付の北国新聞能登版に「土方領の巨松枯死」の見出しで, 江戸時代中期の延宝3年(1675年), 大名土方雄久の領地の一つである黒島村(現在の石川県門前町黒島(Fig. 1))と周りの前田領との境界線に植えられた47本のマツのうち, 現存していた最後の1本が松くい虫の被害で枯死していることが分かったとの記事が掲載された。同年4月15日現地へ赴いたところ, このマツは, 胸高幹周が393cm(直径125cm)で樹高24mの大木であったが, すでに葉は全く残っておらず, 樹皮も所々はがれ落ちていることから, 枯死してから数年が経っていることがうかがわれた。そこで, 年輪年代学の手法を適用し, 枯死年の推定を行った。

この境界マツ(No. NOTO-1)はチェーンソウを用いて切り倒し, 根張りのない部分を円盤試料として採集した。さらに, このマツの周囲に植栽されているアカマツ3個体(Nos. MO-1, MO-2, MO-3)から成長錘を用いてコアサンプルを採集した。試料は研究室に持ち帰り, 年輪幅を計測し, 5年移動平均法により標準化を行い, 移動相関法により, 境界マツの年輪幅の変動とアカマツ3個体の年輪幅の変動の最も相関の高い照合点を抽出した。また, このマツは葉は全く残っていなかったため, 種が分からなかったため, 材の横断・放射・接線の3方向の切片を作成し, 光学顕微鏡により樹種を同定した。

その結果, 境界マツは樹齢254年のクロマツ(*Pinus thunbergii* PARL.)であることが分かった。また照合に使ったアカマツの樹齢は3個体とも54年生であった。境界マツとの照合結果については, アカマツの樹齢が54年と少なく, 枯死木には不連続年輪が多くみられたことから, 相関係数は低かったが, アカマツ3個体ともその最外年輪から4年目の位置に境界マツの最外年輪を照合したときに最も相関が高くなった。さらに, 境界マツの不連続年輪のでてなくなった最後の25年間の部分(Fig. 2参照)とアカマツ3個体の年輪幅変動を照合すると, 先ほどと同じように, アカマツの最外年輪から4年目に境界マツの最外年輪がきたとき最も相関がよく, NOTO-1はMO-1, MO-2, MO-3とそれぞれ $r=0.53, r=0.25, r=0.45$ の相関係数が得られた。アカマツは1991年4月に採集したため, 1991年の年輪はまだ形成されていないので, アカマツの最外年輪は1990年のものである。つまり, 1990年の4年前ということになり, 境界マツは1986年の年輪まで形成し, その後枯死したことが明らかになった。

また, このマツの樹齢は254年であったことから, 1733年(享保18年)に生育し始めたことになる(Fig. 3)。このことは1675年(延宝3年)に植えられたとされる記録と矛盾する。郷土史によると, 1675年に塚を築き, そこにマツを植えたことは明らかだが, その後何度か嵐などにより, 塚が崩壊したり, マツが根返ったりした

ウが共存していたが、能登半島とは逆にハマナスが優占し、ハマゴウは後方部分に出現していた。すなわち北方系のハマナスの南限地帯ではハマゴウより安定した内陸側にハマナスが優占し、南方系のハマゴウの北限地帯では、ハマナス帯の内陸側にハマゴウが優占していることになり、それぞれの勢力が弱くなる地方で、相対的に後方、すなわちより安定した部分に出現することを示唆している。

またZ4にカシワが出現しているところがあり、かつては自然植生としてカシワ低木林が発達していた可能性を示している。海岸に発達したカシマ林は九州北部まで分布しているが、生育立地は崖地に限られ (NAKANISHI, 1985), 砂丘上に発達したカシワ林としてはこの地域が南限と考えられる。

砂丘の発達と各植生帯の幅とは関係があり、南日本においては砂丘が低平なところではZ2aがよく発達しているが、Z2bは幅狭く、砂丘が発達し比高が高くなるにつれて、Z2aが幅狭くなり、代わってZ2bがよく発達するようになる (中西・福本, 1987b, 1988, 1990)。本地域でもそのような関係は認められるが、砂丘が比較的低平である地点 (例えば Nos.5, 11) でとZ2aは幅が狭く、Z2bがよく発達している。これは砂の堆積や移動が比較的少ないためであろう。本地域の砂質海岸の海岸線は、多くが冬期季節風の北西方向に面しているにもかかわらず、砂丘はなだらかで、比高はやや低い。これは冬期に浜の部分や砂丘の前面が積雪によって覆われたり、波浪による海水のしぶきによって砂が湿り、飛砂が押さえられるためと思われる。

引用文献

荒巻 孚. 1971. 海岸. 426 pp. 犀書房, 東京.
 BRAUN-BLANQUET, J. 1964. Pflanzensozologie. 3 Aufl. 865pp. Springer Verlag, Wien & New York.
 FRIEDMAN, G. M. 1961. Distinction between dune, beach and river sands from their textural characteristics. Jour Sed. Petrology 31: 514-529.

FUKUMOTO, H. 1977. A proposal of definitive terms used in paralic topography. Study Report. Baika Jr. Coll. 26: 75-88.

石川県理科教育センター生物室. 1974. 県内3地区に見られる海岸砂丘植物とその帯状分布について. 石川植物の会々報 2: 1-13.

気象庁. 1988. 昭和64年潮位表. 日本気象協会, 東京.

国立天文台. 1989. 理科年表平成2年. 1032 pp. 丸善, 東京.

三位秀夫. 1966. 沖積世における海岸砂洲の発達過程. 第四紀研究 5: 139-148.

NAKANISHI, H. 1985. Phytosociological studies on *Quercus dentata* scrubs of rocky coasts in Japan. J. Phytogeogr. & Taxon 33: 1-20.

中西弘樹. 1988. 海浜地形と海浜植生に関する用語について. 植物地理・分類研究 36: 123-126.

中西弘樹・福本 紘. 1985. 石垣島の砂丘植生の成帯構造の成立. 日本生態会誌 35: 513-525.

NAKANISHI, H. and FUKUMOTO, H. 1987. Coastal vegetation and topography in northern Hokkaido, Japan. Hikobia 10: 1-12.

中西弘樹・福本 紘. 1987a. 吹上浜における海浜植生の成帯構造と地形. 中西哲博士追悼植物生態・分類論文集. pp. 187-195. 神戸群落生態研究会, 神戸.

中西弘樹・福本 紘. 1987b. 南日本における海浜植生の成帯構造と地形. 日本生態会誌 37: 197-207.

中西弘樹・福本 紘. 1990. 北海道オホーツク海沿岸における海浜植生の成帯構造と地形. 植物地理・分類研究 38: 51-60.

中西弘樹・福本 紘. 1991. 山陰地方における海浜植生の成帯構造と地形. 日本生態会誌 41: 225-235.

坂井典一・寺下友三郎. 1976. 大川浜の海岸植物とその帯状分布について. 石川植物の会々報 7: 17-19.

和達清夫. 1958. 日本の気候. 492 pp. 東京堂, 東京. (received June 2, 1993; accepted Oct. 28, 1993)

○ 日本第四紀学会 (編) 第四紀試料分析法 東京大学出版会, 1993年, A5判, 77+556頁, 9785円 (税込み)。第四紀とは最新の地質時代で、約165万年前から現在までを言い、この時代の地質、地理、植生、動物相、人間活動など、ありとあらゆる事象を研究対象とするのが第四紀学である。このように研究対象は極めて多岐にわたるため、その調査法、分析法は実に様々で、各人が全ての調査法、分析法に精通するのは不可能に近い。そこで「なんらかの分析を具体的に始めようとする人」や「分析値だけを利用しようとする人」のために「あるテーマに対してどの分析法が最適か」を知り、その分析法のための試料の採取法や前処理の仕方、そして「その分析法の原理、仮定、適用条件、分析法の概略、測定値の補正、誤差、問題点など」を解説したのが本書である。

本書は77頁の小冊子「1 試料調査法」と本体である556頁の「2 研究対象別分析法」の2分冊からなる。小

冊子は研究試料を如何に採集するかに重点をおいて、野外に持ち出せるように簡潔にまとめることを、そして本体はそれを研究室に持ち帰ってから実際どうするかを意図しており、なかなか面白い試みである。

「1 試料調査法」の内容はI 第四紀試料調査法とII 試料採集法、からなる。Iは第四紀の試料調査が総合的・学際的であるが故に諸分野の人と協力して調査を行わなければならないことを著者の事例をあげて説いている。IIでは本体の各項目に対応してそのための試料を如何に採集するかが簡潔に述べられていて、これなら自分も試料を取ることが出来るように思える。

本体の「2 研究対象別分析法」の内容はI 土壌・堆積物編、II 化石編、III 遺物編、IV 年代測定編、の4部からなり、Iは土壌、堆積物、ラフラ、IIは微小植物(花粉、珪藻化石などのこと)、大型植物(葉、果実、種子、材化石などのこと)、無脊椎動物、脊椎動物、生痕、IIIは石器、土器、木器、骨器、青銅器、鉄器、IVは年代測定法の大項目が有り、さらにそれぞれが又小項目に分けられ、総勢60余名による分担執筆が行われている。各小項目は基本的にはこの分析で何が分かるのか、その原理は何か、どこまでどの精度で適用できるのか、試料はどう処理するのか、実際どのように分析のか、実際の分析例、そしてその分析法にはどんな問題点があるのか、が述べられている。

本書は花粉分析や植物珪酸体分析など、われわれ植物の研究者が分析結果については身近に接することの多いものが実際の分析がどのように行われ、どこまで適用でき、またどこに限界があるかを知る上で大変役に立つ本である。この本1冊でその分析法をマスターするのはむずかしいが、これを導入として文献を捜せるようになっていたので、これらの分析法をやってみたいと思われている方にはお勧めである。(鈴木三男)

○ 北村四郎 植物の分布と分化 アジア東部の顕花植物の分布と分化と自然保護(北村四郎選集V) 1993年7月31日、保育社発行。A 5判、扉絵10+縦書きの部299頁+横書きの部256頁。12,000円。

北村四郎選集全5巻が完成した。第1巻 落葉(1983)、第2巻 本草の植物(1985)、第3巻 植物文化史(1987)、第4巻 花の研究史(1990)である。他の4巻がすべて縦組みであるの比べ、第5巻の本書は縦組みと横組みが相半ばする変則的な構成となっている。それは、本書が著者がこれまでに書いた論文や論説をまとめ、誤りを訂正し、不足を補い、その後の進歩を追加した内容となっているからである。目次をひろくと、縦組の部には国際文化193号(1970)発表の「花の国籍」など7件の論説のほか76頁にわたる年譜が収められ、横組の部には、平戸学術調査報告(1951)発表の「平戸島の植生」ほか新しく書かれた総説「中国と中央アジアの植物」「日華区系用語」「日本の蛇紋岩植物相の研究」が含まれている。今年、米寿を迎えられる著者が変らぬ知的な情熱をもって、これだけの大著を物にされるとは驚くの外はない。直接教えを頂いた者として、先生の選集の完成をお慶びするとともに、益々の御健康をお祈りしたい。(清水建美)

○ 金井弘夫 新日本地名索引 1. 50音篇、2・3. 漢字篇 1993年10月28日、アポック出版局発行。B 5判、2,014頁+2,634頁+2,587頁。155,000円。

先に、20万分の1地勢図による「日本地名索引」を刊行した著者が、植物地理学の必要上、これには飽きたらず、国土地理院発行の2万5千分の1地形図に現われるすべての地名の位置を、経緯度で示した索引として本書全3巻を発行した。収録された地名は、行政区画名を除くすべての文字列で、その数は384959件に上る。

第1巻は50音篇で、地名のよみに続いて地名漢字・2.5万国幅名・市町村名・県名・東経・北緯が示される。たとえば、金沢を引くと42件あるが、石川県の金沢は、「かなざわ 金沢(駅) 金沢 金沢市 石川 136°39'36"34」のように示される。また、漢字篇では、巻末の音訓索引のキンあるいは巻頭の字画索引から「金」の文字番号12380を知る。文字番号は頁下欄に示されているので次に第1文字のある頁を開く。続いて第2文字「沢」の文字番号06603が分かれば、「金沢」は12380・06603と記された頁を開けば見つけることができる。コンピュータに精通した著者ならではの地名索引である。いささか値ははるが、この書を座右におけば、与えられた地名がどこにあるのかを探しあぐねる時間と労力のロスがなくなることは請合いである。(清水建美)

○ ハロルド・クーポウィッツ ヒラリー・ケイ(大場秀章訳) 植物が消える日 地球の危機 1993年10月20日、八坂書房発行。B 6判、381頁+索引・関係資料22頁。2,500円。

10年前、本書は植物の重要性をどのように一般の人々に理解してもらおうか、また、その植物に忍び寄る絶滅の危機を前にして人間として何をすべきかをテーマとして出版された Plant Extinction: A Global Crisis の訳書である。第1部 植物はほんとうに重要なのか、第2部 絶滅の様相を世界に探る、第3部 現代の船舶、第4部 植物愛好家の役割、第5部 政治的問題、の5部20章からなる。著者の一人クーポウィッツは、カリフォルニア大学付属アーヴィン植物園園長であり、とくに遺伝子バンクに関心をもつ。その意味で第三部は読みごたえがある。巻末には、関係資料として世界の主な自然保護団体一覧や植物のレッドデータ一覧がある。

(清水建美)

- Res. Ctr. 21 : 123-130 (in Japanese with English summary).
- KUNII, H. 1991. Aquatic macrophyte composition in relation to environmental factors of irrigation ponds around Lake Shinji, Shimane, Japan. *Vegetatio* 97 : 137-148.
- OHWI, J. and KITAGAWA, M. 1983. *New Flora of Japan*. 1716 pp. Shibundo, Tokyo (in Japanese).
- SIMODA, M. 1983. Aquatic plants of ponds in and around the new campus of Hiroshima University. *J. Phytogeogr. & Taxon.* 31 : 46-57 (in Japanese with English summary).
- SIMODA, M. 1985. Phytosociological studies on the vegetation of irrigation ponds in the Saijo Basin, Hiroshima Prefecture, Japan. *J. Sci. Hiroshima Univ., Ser. B, Div. 2* 19 : 237-297.
- SIMODA, M. 1991. *Nuphar* from the Saijo Basin, Hiroshima Prefecture, western Japan. *J. Phytogeogr. & Taxon.* 39 : 1-8 (in Japanese with English summary).
- SIMODA, M. 1993. Effect of urbanization on pond vegetation in the Saijo Basin, Hiroshima Prefecture, Japan. *Hikobia* 11 (in press).
- SIMODA, M. and HASHIMOTO, T. 1993. Water plant distribution and water quality of irrigation ponds. *Bull. Water Plant Soc. Japan* 49 : 12-15 (in Japanese).

- TAKAGI, M. 1981. Aquatic plants in the ponds of Ishikawa Prefecture. *Bull. Wat. Plant Soc. Japan* 5 : 9-11 (in Japanese).

摘 要

西条盆地のため池にはコウホネ、サイジョウコウホネ(コウホネの変種)、ベニオグラコウホネ(オグラコウホネの変種)の3種類のコウホネ属植物が生育している。

コウホネ属植物の生育環境と群落を明らかにするため、コウホネ類が生育する51個の池において、植生を調査しpHと電気伝導度を測定した。いずれのコウホネ属植物も、ヒソジグサージュンサイ群団とヒシ群団に所属する浮葉植物群落の構成種となっており、特定の植物群落内に生育が限定されることはなかった。またコウホネとサイジョウコウホネは、水が浅い所では挺水した。調査した池水のほとんどは、pH値が6-7、電気伝導度の値が20-100 μ S/cmの範囲であり、3種類間に明かな差は認められなかった。

今回の調査結果とこれまでの西条盆地の水草に関する研究報告から、コウホネ属植物は、西条盆地の水草の中では比較的広い生育範囲を持つものと考えられる。しかしながら、水の汚濁や池の埋め立てなどにより、西条盆地のコウホネ類の生育地は減少している。

(received June 30, 1993; accepted Oct. 15, 1993)

- 日本自然保護協会(編)生物多様性条約資料集 日本自然保護協会資料集第33号 1993年8月1日、日本自然保護協会発行。B 5判、196頁。2,500円。

生物の多様性やその保全といったことばは、このところ大へんよく耳にするようになったし、生物学の分野でも現代は多様性の生物学の時代だといわれる。

そんな折、日本自然保護協会は、創立40周年記念国際セミナー「生物の多様性を守る」を、1991年10月26日に開いた。本書の前半は、そのシンポジウムの内容を紹介したものであり、世界のオピニオンリーダーたちが何を考えているかを知る貴重な資料である。後半は資料編で昨年6月、リオデジャネイロで開催された環境と開発に関する国連会議(UNCED)で採択された「生物の多様性に関する条約」、生物の多様性の保全に関わるアジェンダ21の15、16章、NGO条約の16、17章、1992年2月、ベネズエラ・カラカスで開かれた第4回国立公園保護地域会議で発表された生物の多様性保全のための地球戦略、1991年5~6月にノルウェー・オスロで開かれた植物遺伝資源に関するキーストンセンター国際会議第3回総会における最終合意報告書「植物遺伝資源の保全および持続可能な利用に向けての地球規模での先導的試行」(グローバルPGRイニシアチブ)が、それぞれ、全訳あるいは部分訳されて収められている。世界における生物多様性の議論のための客観的資料として重用したい。(清水建美)

- 正宗厳敬先生追悼文集編集委員会(代表里見信生)(編)正宗厳敬先生追悼文集 1993年12月、同編集委員会発行。A 5判、135頁。頒価2,500円+送料。

植物地理・分類学会の前身、北陸の植物の会の創始者であり、金沢大学理学部植物分類・地理学講座の初代の教授であられた正宗厳敬先生が、平成3年6月18日になくられた。本書は、北陸の植物の会でも金沢大学でも当初から先生とともに仕事を進めて来られた里見信生氏を中心として、ゆかりの方々の追悼文50篇を収めたもので、先生のありし日の姿が多面的に浮き彫りされている。正宗先生の人となりを知るには貴重な資料である。巻頭には5篇の遺稿がある。入手御希望の方は、里見氏に照会されたい。(清水建美)